

愛知大学通信

中国訪問で大きな成果

— 本学、学術訪中団一行帰国報告 —

高く評価された

愛大刊

中日大辞典

本学と中国との「きずな」復活

訪中レポート

本学と中国との絆、再び深まる。約二十日間という短い日程であったが、今回の訪中団の中国での足あととは今後、中日大辞典のための資料交換のほか、広く学術交流への着実な足がかりとなった。

本学の学術訪中団（団長・鈴木択郎教授）は、さる六月十五日出発し、実り多い成果を得て七月五日帰国した。本学中国研究スタッフが出版した中日大辞典は中国でも高く評価され、また全面改訂に必要な資料も豊富に収集。さらに南開、復旦（ふたん）兩大学との学術交流や、広州―北京―天津―西安―上海など中国の中心都市を訪れて友好を深めた。

北京では、郭沫若中国科学院長と会見し「人民日報」紙上でも、「友好深める日本の学者」として、大きく報道されるなど日中友好の貴重なかけ橋の役割を充分果たしたといえよう。

以下、鈴木団長はじめ訪中団一行の中国の印象や大学の実情をつぶさに報告していただいた。

学会の交流を開いた訪中

出 発

団長 鈴木択郎

五月十五日突然、天津南開大学から招待電報を受け取った。南開大学から招待された理由は、当方の訪中の目的が中日大辞典に関する事なので、科教祖から文科系の三大

学、すなわち南開大学、北京の北京大学、上海の復旦大学に依頼し、責任校として一切の世話を南開に委託したというのであると思う。

前に中日大辞典刊行会評議会によって決定されていた左記四名の団員は六月十五日出発をめどに直ちに渡航手続を開始した。

団長 鈴木沢郎（文学部教授）

団員 池上貞一（法経学部教授）

同 今泉潤太郎（教養部助教授）

同 中島敏夫（文学部助教授）

訪中団は予定通り六月十五日に羽田をたった。

香港、広州

六月十五日九龍空港着、一泊。十六日午前深圳から入国。深圳には南開大学から派遣された天津国際旅行社所属の通訳符言氏が出迎えてくれた。広州駅に着くと、そこには南開大学から派遣された李何林教授、事務局責任者張宗法氏、広州市教育局革命委員会主任林史氏、師範大学教授李顯仁氏、広州市外事処主任等が出迎えて下さった。李何林教授は張宗法氏からきいたところでは一九二七年八月、南昌蜂起に参加した人だのとこの、魯迅および近代文学研究で有名な人である。

この李教授、張宗法氏、符言氏は、われわれがこの旅行をおわり、この広州から出国するまで、炎暑の季に、二週間にわたりずっとわれわれにつき添って世話をして下さいました。われわれが御苦勞をねぎらい感謝のことばを発すると、「わたしはあなたより若い」「中日友好のため、中日文化交流のためだ」といわれ、勞をいとわれなかつた友誼の厚さと誠実さには敬意と謝意を表せざるを得ない。

われわれは特別の待遇を受けているのか、建物はあまり大きくはないが、豪華にして閑静な庭園のある迎賓館に泊められた。

午後四時から車三台に分乗して市内見学。夜は教育局主任林史氏の歓迎宴に招待された。

六月十七日、広州博物館、農民運動講習所、革命陳列館見学。

上海經由―北京へ

午後四時三十五分広州発飛行機で上海へ、六時二十一分上海着。空港で夕食をすまし、七時五十分発北京へ。九時五十分北京着、空港には南開大学さしまわしの自動車三台と用務員二人とが待っており、直ちに天津へ行く予定だったが、時間がおそいので北京へ泊ることになった。

北京から天津へ

六月十八日、九時出発、途中天安門前で下車、人民英雄碑を見て天津へ向かった。道路は舗装され、並木は茂っていた。沿道には農民たちが刈りとった小麦を路上にひろげ、その上を自動車を通らせ自然脱穀をしていた。農民がだいにされるお国柄である。農

民の便利のためには交通上の不便など問題ではないらしい。もともと交通量は極めて少ない。道路はたいらで、両側はひろびろとした河北平野である。見わたす限りの畑、その間に農村が点在している。

午後一時頃天津着。南開大学の人に迎えられて天津飯店（元英租界のアストロホテルだったとのこと）へ入った。四時から李何林教授との日程の打ち合わせ。三日間を天津で消化し、あとは北京、上海を経て広州へ六月三十日着、全工程飛行機利用とのことであった。当方から西安を加え、上海広州間を汽車にするよう要望した。

夜は天津市革命委員会副主任（旧副市长に当る）王曼恬女史の招宴あり、李何林氏ほか数氏および外事処副主任等が陪席した。

南開大学の概況

六月十九日、九時、中国製自動車「上海」三台に分乗して南開大学へ。

会場にあてられていた中文系の校舎へつくと革命委員会副主任（旧称副校長に当る）呉大任氏はじめ、中文系、歴史系、日文教研組の諸教授多数が建物の前に出て拍手と握手で迎えてくれた。帰るときも同様であった。このような

送迎は朝夕ばかりではなく、昼飯に帰るときも同様で、毎日これがくりかえされた。午後は副主任から南開大学の概況の説明があった。

南開大学は一九一九年に設立された私立大学であった。一九四九年に一たん解散され改めて設立されたもので、現在は全国から学生を募集する全国性文理科大学である。学部は九系（学部）、二八專業（専攻）がある。九系は中文、外文、歴史、哲学、政治経済学、数学、化学、物理生物である。敷地は二百万平方メートル。

文化大革命後数年間は他大学同様学生募集を中止し、一九七一年九月に募集を行い、現在は第二次までしかない。現在学生数は一四七〇名、今年九月には九六〇名を募集する。将来は四〇〇〇〜五〇〇〇名に達する予定。入学資格は初級中学卒業（現在高級中学卒業者はない）で二年以上の工、農、兵の労働歴あり、各単位から推せんされたものを大学が復試を行って入学させる。

教学方針は一九五八年八月毛主席がこの大学を視察した際与えた重要指示によっている。そのそれは、一、党委員会による指導、二、大衆路線によること、三、教育は生産労働と結合しなければならない、ということである。学生、教授は旧大学制度を批判し、教育方法、教育内容においても創造的な試験が行われ、教育革命は好成绩をおさめた。しかし、無産階級による指導権は解決していなかったため、劉少奇らによる修正主義教育路線が系統化され、毛沢東指示による教育革命は一九六六年のプロ文化大革命を待たなければならなかった。

呉副主任の概況説明の後、中文関係の授業参観、図書館見学をおわり、一たん宿舍に帰り、昼食、休息の後二時半から特種工芸品（蠟彫彫刻）工場を見学。

「中日大辞典」検討会

六月二十日、午前は九時から十一時半まで、午後は二時二十分から六時まで中日大辞

典に対する評価や検討があった。

翌二十一日も午前八時五十分から十二時まで同様のことが行われた。中文系、歴史系、日語教研室等の教授七名から発言があった。各教授は「不成熟な意見だから御参考になれば幸である」と前置きをいわれながら、みなよく研究しておられた。中日の立場の差、あるいはわれわれ編者の不勉強、不注意のため、中国人の思想感情に合わない表現なども指摘され、われわれにとつて非常に有益であった。時にはきつい発言もあったが、非常に友好的で、この辞典は中国人にとつても必要な辞典であるから一層改善されようとしていることは望ましいとのことであった。

午後はわれわれ代表団から報告を行った。鈴木団長は「日本の中国研究と愛知大学」、池上教授は通訳を介せず直接中国語で「日本における中国思想史研究」、今泉助教授は「愛知大学及びその他の大学ならびに大学以外における中国語研究状況」、中島助教授は「日本カナと日中友好」という題で報告を行った。聴講者は南開大学中文系の教授、研究員等約四十名であった。予定の時間もだいぶ過ぎ、われわれから忙しい方は自由退場されんことを申出たが、一人も退出した人はなかった。

南開大学への提議

報告終了後、代表団より南開大学に対し、次の四項目の提案をした。

- 一、愛知大学は南開大学教授の日本訪問を歓迎する。期間は二週間とし、時期は貴方の都合により決定されたい。日本国内における一切の費用は愛知大学が負担する。
- 二、教授の交流、即ち教授が相手方の国にある期間滞在して研究する場合、相互に援助する。
- 三、学生の訪問旅行あるいは短期の滞在学習を相互に行い、両大学はそれぞれ適当な援助をする。

四、研究上における交流を深め、研究資料、出版物の交換を行う。中日大辞典に対しても今後とも御指教を願いたい。

提案を終わって両大学の間に贈物の交換が盛んな拍手裡に行われた。

南開大学からは次の小学関係書籍四種が贈られた。これらは本学図書館にもあるものだが、版本が乾隆乃至同治のもので珍重さるべきものである。1、説文通訓定声。2、方言。3、経伝釈詞。4、經典釈文。代表団からはテープレコーダー一台および中日大辞典（新版のもの）二冊を贈った。

針麻酔見学

六月二十二日、八時天津医院の骨科を見学。接骨は針麻酔をかけ手法で復位し、二枚の板で挟んで固定する。この間患者はすこしも傷みを感じなかったようであった。石膏のギブスは回復をおくらせるので使用しないとのこと。筆者も骨折の治療をうけた経験から、この方法には賛成である。人民日報によればこの日の北京の最高気温は三十八度であった。

大躍進の西安・上海都市

|| 至れり尽くせりの歓迎ぶり ||

本学卒業生と北京で『ニイハオ』

天津から北京へ

十二時南開大学で呉れ副主任はじめ諸教授が出席し、学内厨房の料理で送別会があった。三時自動車で北京へ。六時すぎ十八日に泊った友誼賓館へ入った。

郭沫若氏と会見、北京大学訪問

六月二十三日午前中故宮内の首都文物出土品展覧会を見学。午後三時三十分一同人民大会堂北京市庁で郭沫若氏（人民代表大会常務委員会副委員長、科学院長）に会見。先方列席者は葉籟士、胡守鑫、李何林、崔泰山の諸氏であった。当方からは中日大辞典については当初からたいへんお世話になったお礼をのべ、郭氏からは辞典二千冊（実は千二百冊）の寄贈を受けたお礼を述べられた。文字改革などについてなごやかな応酬があり、四時十五分辞した。

この後北京大学訪問。郵便局から大学へ書物を送るのに意外に暇どり、北京大学へ着いたのは五時をだいぶ過ぎていた。革命委員会副主席や諸教授に迎えられ、先ず中文系の図書館を見学した。同大学の蔵書は二百万冊、日文の図書だけでも三十余万冊あるという。敷地はもとの燕京大学をさらに拡張したもので丘あり林あり池あり川ありで、広大なものである。ここでも中日大辞典に関する準備はしていかれたと思うが、時間の関係かその話は出ず、直ちに革委副主任の招宴になった。陪席した人は中文系古漢語專業の老教授周祖謨氏、近世文学教授林庚氏、東方語言系日文專業下立強氏等であった。周教授は漢語音韻研究で有名であり、同教授の諸論文は読んでいるので、「一見旧知の如し」であった。

長城・十三陵・故宮

六月二十四日午前中八達嶺の長城、十三陵の定陵、長陵、故宮博物館内近代絵画館、珍宝館を見学。

愛大同窓生の招宴

夜、北京駐在または出張中の愛知大学卒業の諸君から西四の同和居で御馳走になった。料理はうまかったし、室は二階の広い明るい外賓用のもので、階下の中国人用の狭いほの暗い室とほだいぶちがう。外賓優遇は徹底しているが、毎日新聞の高田氏（？）などには外賓隔離と感じたのもうなずける。客側には、われわれ一行の外、本学名古屋校舎図書館におり、今年四月再度北京大学から招聘された岡崎兼吉氏もおられ、主人側は釜井卓三（二三年卒、読売新聞特派員、当日藤山愛一郎氏の招宴があったので職掌柄欠席）、鈴木康雄（二五年卒、東工物産）、水野忠志（四〇年卒、原子展覧会のため出張中）、伊藤嘉彦（四四年卒、東工物産）、浦川剛（四四年卒、郡是産業）、大水利夫（四五年卒、太平洋物産）の諸君であった。

西安

六月二十五日七時三十分飛行機で西安へ。飛行機は「農業は大業を学べ」で有名な大寨上空と思われるあたりを通過、段々畑がきれいな貝殻を伏せたように見える。太原へ着陸。水の涸れた黄河の上空を横切り、十二時西安着。西安市革命委員会外事処主任、西北大学教授楊春霖氏らの出迎えを受け、貴賓室で西安概況の説明を受く。宿泊所は先年訪中のとき泊ったことのある人民大廈である。

西安には名勝古跡が多い。有史前のは六千年前の村落遺跡が発見され、それにすっぽり屋根をかけ、半坡博物館として保護されている。有史以後では三千年前の西周以来、秦、漢、唐など二千年にわたり都のあったところである。陝西博物館、秦始皇帝陵、小雁塔、大雁塔、華清池、その他古跡名勝は枚挙にいとまがない。

華清池は郊外三十キロばかりのところ、長恨歌に「春寒賜浴華清池」と歌われているところ、唐玄宗と楊貴妃とのロマンを秘めた温泉で、今も温泉は滾々と湧出している。

また同じところで一九三七年には蒋介石が麾下の將軍に監禁され、それによって国共合作、抗日統一路線ができた重大な意義のあった西安事変はこの華清池でおこったものである。

西安は解放後、紡績を主とする軽工業の重要な土地となり、解放前の消費都市は一躍して重要な生産都市となった。一九五八年に来たときは人口一四〇万人といわれていたが、現在は二五〇万の人口を擁する大都会となった。

上海

六月二十七日九時五分西安を飛び立ち、途中鄭州、南京を経て二時五十分には上海着。飛行機は西安から大体黄河の南、秦嶺山脈を眼下に見て東に飛ぶ。平野が開けんとし鄭州に着く。鄭州を飛び立てば景観は陝西・山西とは全く異なり眼下は一面の河南、江蘇の大平原、大小の湖と河川である。機は東南へ、間もなく黄龍にも似た長江を横切り南京へ着陸。南京を飛びたてば水郷の上を飛ぶこと一時間にして上海虹橋飛行場に着く。外事処の人や復旦大学の劉大杰教授らに迎えられる。空港の待合室に休憩していると日航機が発することを呼び掛けて通る日本人があった。これは遺骨送還の帰りで、本学の前同窓会長伊藤治雄君も乗っていたとのことであった。

外事処差廻しの例の「上海」三台に分乗して、虹橋路を東へ走った。筆者が終戦時まで二十八年間住んだところはこの道路に沿っているのだが、その辺はすでに市街化しており、その位置を確かめることもできなかった。三時三十分衡山賓館着。このホテルは戦時中からあり、この辺でいちばん高い十四階のマンションであった。十四階からは龍華の塔も黄浦江も南市越しに見えた。

夕刻一時間あまりの時間を利用して南京路へ出て、新華書店、上海第一百貨商店（元の大新公司百貨店）で買物をした。書店の書物も百貨店の商品も少なく、街の外観は古ぼけたままであり、バスのほか自動車はほとんど通らないので、大通りはことろきらわ

ず横断する人々でまさしく歩行者天国である。

夜は上海市革命委員会副主任劉芳女史の招宴があった。女史は教育担当の副市长級の人である。

魯迅墓・蕃瓜弄・五七幹部学校

六月二十八日、上海工業展、虹口公園内魯迅墓および魯迅故居等を見学。午後は蕃瓜弄とその託児所訪問。解放前の非人間的な生活と現在の生活とが対比できるような仕立てあり、いわゆる「憶苦思甜」の見本である。南開大学の幼稚園でもそうであったが、ここでも子どもたちは声をそろえて「叔叔好！」と連呼していたが、筆者を見ると「爺爺好！」とことばをかえて歓迎してくれた。

夜七時から九時まで五七幹部学校の幹部および學員ら四名からその学校の状況を説明してもらった。上級幹部のきびしい修練の大体がわかった。この学校の參觀希望を申し出ていたのだが、学校まで七十キロもあるので先方から来てくれたのであった。

復旦大学訪問

六月二十九日、復旦大学訪問。先ず革命委員会副主任から概況説明を受けた。

本校は解放前は国民党の重点大学であったが規模は小さかった。開放後規模は拡大され、

敷地面積は三倍、建物は四倍、図書は二十倍で一六〇万冊になった。学部は文科理科の十三系、外に五研究所、二工場を持っている。学生二二九〇名、教授一五一名、講師二九二名、助教一三三一名、助教はすでに教授の力を備えており、これが主要なる教授の後継者である。この外、半年、一年半、二年の鍛錬班、訓練班がある。

理論と実際の結合のため自ら二工場を経営しており、文科学生は農村や工場へ行って労働し、階級闘争に参加し、自己の思想を改造する。また社会調査をして放送や新聞で発表し、散文、詩、小説などを人民出版社から出版した。

この大学は日本語教育には成果をあげている。日本語教室を參觀、朗読と通訳とをやつて見せてくれた。たいへんりっぱなでき映えだった。一年次生であったが、昨年九月入学したのだから、まる十か月学習した学生であった。上海放送局の日本語講座テキストはこの大学の日語教研室編纂のものである。時間はわずか一時間だったが、ここでも中日大辞典に対し貴重な批評を受けた。午後、虹橋人民公社見学。

上海から広州へ

六月三十日、上海駅へ着き貴賓室に時間待ちしているところへ、賓館から誰かが忘れてた上着をとどけてくれた。忘れ物は迷惑をかけるので日頃いましめ合っていたところだった。忘れた上着は今泉君のものだった。池上君はすかさず中国語で「この人はわれわれの秘書長なんですよ」とやったので一同どっと笑ったという喜劇が一幕あり、八時四十八分汽車で上海発。働いている人、駅の風景、川の流れ、土のにおい、点と点をつなぎ、その両側に広がる面を見、中国をじかに感ずることができた。飛行機で二時間のところを三十二時間もかけたことに悔いはなかった。しかし、亜熱帯の夏の三十二時間

は、同行して下さった李教授ら三人にはたいへん迷惑だったことで申し訳ないことであつた。七月一日十七時三十五分広州着。往きと同じく教育局長林史氏、師範大学教授李顯仁氏、外事処主任等の人々に迎えられ東方賓館へ入つた。夜はまたも林局長の送別の宴があり、この二週間に経験を積んだ「中日友好のために乾杯」の交歓があり、なごやかな一夕を過した。

香港へ

七月二日、昨日出迎えて下さった人々、二週間同行して世話をして下さった南開大学の李教授、張宗法氏らに送られて広州をたつた。深圳で二週間の御苦労を謝して符言氏と別れ香港へ向かつた。九龍の美麗華酒店 (Miramar Hotel) へ入つた。

七月三日、車で香港島一巡。

七月四日、九時報告会の打合わせをし、午後は買物や市内見物に費した。夜は同文書院同窓会香港支部の諸君から招待を受けた。客側はわれわれ一行四名、今春早大を出て三菱の語学研究生として来ている若者、主人側出席者は中国人三名、日本人六名であつた。愛大卒業生も数人居ると思うが連絡がとれなかつた。

帰校、記者会見、報告会

七月五日、BOAC機で香港発、機中で一時間あまり李何林教授からきいた南開大学中文系教学情況についての座談会を持つた。昼頃羽田着。大学からは庶務課の胡麻本君を派して世話して下さつた。四時豊橋着。五時から第一会議室で記者会見をして報告した。

七月六日、午後一時、三十二番教室で学生、教職員に報告し、報告会終了後グラウンドホテルで歓迎慰労会があつた。これでわれわれの訪中旅行は「勝利結束」した。

『中国の大学』訪問記

池上貞一教授

われわれ訪中団が中国に滞在した期間は十七日間であり、この間、天津の南開大学、北京の北京大学、上海の復旦大学の三大学を訪問した。特に南開大学は四日にわたつて訪問したので、同大学での見聞を中心に、中国の大学について、盲人が象をなでる思いで若干述べてみたい。

中国の学校

天津ではホテルと南開大学の間を自動車で往復する途中によく登下校する中学生を見かけたが、かれらの服装は画一的な制服ではなかつた。小学生も大学生もしかりであつた。またすべての学校は昼に二時間程度の休憩時間があり、小中学生たちは自宅に帰

って昼食をとるのである。建国後、学校数が大幅に増加したことは言うまでもないが、大都市の新設小中学校のなかには既存の他の建物を利用したものもかなりあるようで、したがってすべてが標準的な大きさの敷地と建物を備えているわけではない。上海でも世話役の話では、一部に二部授業をやっている学校もあるとのことであった。また天津の公園で話し合った中学生は、授業料は一学期四元（二学期制、一元は日本円の百四十円）で教科書は購入する、外国語は英語を週四回（週三回の中学もある）やっており、天津第二〇中学では日本語とロシア語をやっている、八月には学校から集団労働に行くと言っていた。なお文化大革命後の教学改革によって、中国の教学過程は小学五年、中学五年（初級中学三年、高級中学二年）、大学三年に短縮された。

広大な南開大学

さて、話を大学に戻すと、南開大学の校地の広さは東西二キロ、南北一キロと言っていたから約六十万坪である。教員と職員の大部分は学内に住んでおり、学内には教員の子弟のための幼稚園（託児所を含む）、小学校、中学校が付設されており、付属工場と農場も設置されている。学生は全員寄宿制であり、学費、生活費はすべて無料であるとのことであった。学内にはペンキの赤い地に白字でスローガンの書かれた立看板があちこちに建っていたが、文革時の「大字報」はすっかり姿を消していた。学内には解放军の制服や帽子を被った男女が目についたが、それらは解放军から選抜されて入学している学生たちであった。

南開大学の本部の建物には、「中国共産党南開大学委員会」と「南開大学革命委員会」という二枚の看板が掛かっている。すなわち革命委員会が大学の管理機関であり、党委員会は革命委員会を「領導」するのである。大学は幾つかの系（学科）から構成されており、系はまた幾つかの教研室から構成されている。そして全体の管理機構としては①党委員会領導下の革命委員会↓党総支部領導下の系主任責任制↓党支部領導下の教研室主任責任制の三級制をとっているとのことである。

南開大学の教室棟の廊下の壁に「工宣隊弁公室」の名札がかかっていたが、一九六八年に各大学に進駐してきた工宣隊（労働者毛沢東思想宣伝隊）はまだいるのかと聞いたところ、まだ少しいて党委員会を補佐している、解放軍宣伝隊は撤退したとのことであった。そういえば南開大学革委会主任は軍人タイプであったし、復旦大学で説明に当たった革委会副主任は工宣隊出身であるとの説明をうけた。なお復旦大学でも文革時にはセクト間の激しい対立はあったが武闘はなかった。最も激しい武闘が行われたのは北京の清華大学である。復旦に入ってきた工宣隊は約千名であったとのことである。

中国の大学は、一般には〇〇大学とよばれる総合大学と〇〇学院とよばれる単科大学からなっている。われわれの訪問した三大学とも全国性（ほかに地方性がある）の総合大学であるが、南開大学は中文、歴史、外文、哲学、政治経済学、数学、生物、物理、化学の九系、二十八専攻から構成されている。

現在の北京大学

これに対し北京大学は、文科系としては哲学、中文、外文、歴史、法律、政治、経済、図書館の八系、理科系としては数学、物理、化学、生物、地球物理、地質地理、無線電信の七系から構成されていた。なお各系に共通した必修科目としては政治経済学、哲学、中共党史があり、また休暇は文革以前は夏と冬で二カ月あったが、現在では夏休みと冬休みで一カ月である。中国のすべての大学が、文革の過程で一九六六年から七〇年までの約四年間学生募集を停止していたことは周知の事実であるが、南開大学では七一年に正式募集を始め、六月中旬現在で一学年と二学年がおり、現在の学生数は千七百数十名で、今年（中国では普通は九月が新学期）は九百六十余名募集する、将来の学生数は四、五千名に達するであろうと言っていた。北京大学では現在は一、二学年は欠けており、一学年と三学年しかおらず、学生数は四千余人である。ただし法律系と心理学専攻はまだ募集していない。法律系ではただ公安、司法関係公務員の短期訓練班の教育を行っているだけであると言っていた。復旦では七〇年十一月に初めて学生を募集し、七二年四月に第二期を募集し、現在正規の学生数は千七百余名であると言っていた。また西安の西北大では六月現在一学年しかおらず、上海の交通大学ではまだ学生募集が行われておらず、今年も募集するそうである。

各大学の教学方針

中国の各大学の教学方針は、南開大学の説明では、文革直前まではソ連を模範にしていたのであり、それは欧米と異なるところがなく、修正主義的であり、資本主義を復活させる危険性のある方針であった。そこで文化大革命は、その任務の一つとして教学改革をめざしたのであるが、南開大学の説明では改革は毛主席の指示にもとづいて進められた。指示の重点は、①教育は必ず無産階級の政治に奉仕しなければならない、生産労働と結合しなければならない ②修業年限は短縮しなければならない、学生は実践の経験のある労働者、農民のなかから選抜しなければならない ③学生は文化を学ぶだけでなく、工業を学び、農業を学び、軍事を学ばなければならない、またブルジョア階級の批判も行わなければならない、である。

以上の指導方針にもとづいて、まず入学者の選抜方法が変革された。学生は労働者、農民、解放軍のなかから募集される。本人が志願し、所属単位の大衆から推薦され、上級機関（人民公社から推薦される場合には県の党委員会）の承認を得たもののなかから各大学が選抜する。条件になるのは、①本人の政治的態度 ②一年以上工場、公社、解放軍に勤務したもの ③初級中学卒業程度の文化水準を有することである。復旦大学の日語専攻の女子学生は初級中学を出て二年工場で働いたと言っていた。

次に教学については、従来のように学校でのみ教学が行われるのではなく、「開門閉学」（学校の扉を社会に開いて教学を行う）の方針が取り入れられている。それは第一に教師、学生が工場、農村に向向き生産労働にたずさわることにより、肉体労働を軽べつし、労働者、農民を軽べつする風習を消滅させ、労働者、農民との間を感情的に融合させることができる。

第二に、書物から学ぶだけでなく、理科系は実際に工場や農村で生産に従事することによって実践から学ぶことができるし、労働者、農民から学ぶことができる。文科系も社会調査や社会に出て関連のある仕事に従事することを通じて生きた教育を受け、また労働者、農民から教えを受けることができる。第三に社会における階級闘争に参加することによって、階級的観点を強化することができる、ということがねらいである。

また学内における教学においても、従来のように教師が講義をし、学生が聞くだけではなく、学生が自分で思考し自分で問題を分析し解決する能力の養成が目ざされており、教師は観点や方法上の指示を与えるのだと説明された。試験の方法についても、つめこみ式やまる暗記式の試験方法に反対し、問題を分析し解決する能力を測定することに重点を置くと言っていた。そして最後に、教学改革はまだ試験的段階にあることを強調していた。

中国の大学は、まさにわが道を行く中国社会主義とその現状の反映であるということができるであろう。またその教学改革から何を汲みとるべきかを、私もじっくり考えて見たい。

中日大辞典に関する南開・復旦両大学での座談会

今泉潤太郎助教

得難い体験

二週間余にわたる中国での経験は充実したものであった。訪中の主な目的である中日大辞典についての座談会、それは天津南開大学で一日半、上海復旦大学で半日足らずであったが、私にとってここでの時間は得難く貴重なものであった。いま、当時の座談会録音したテープを聞き整理しながら、発言者の表情をあざやかに思い出す。ときに激した口調で話されたW教授、講義の際と変らぬ態度で諄々と述べられた温和なX教授、闊達な人柄そのままあけっぴろげでよく笑われるL教授など、その声とともに現れてくる。緊張が心地よく覚えるひとときであった。

座談会のこと

両大学でも座談会は、ここの文学、語学、歴史関係の二十名余りの先生方が出席されて行われた。先方には数冊の中日大辞典が備えてあった。かなりの時間にわたり、大勢でこの座談会のために準備されたらしく思われたが、その発言を聞くに及んでそれが確められた。それは各人の発言が重複していないこと、辞典本文全般におよんで指摘されていること、思想、文学、歴史、言語の各面から発言されていることなどからも窺えた。銘々が手帳に書きこんだメモを見ながら意見を述べる際、「これは個人の意見であり、成熟していない初歩的な意見にすぎない。御参考に供するだけである」と、どの発言者

も一様に述べられる。発言内容は時に厳しいものもあったが、まことに謙虚態度であった。南開大学での座談会終了の際、司会役の李何林教授の挨拶に、「自分達の意見は成熟していないばかりでなく、誤りが有るかもしれぬ。御教示を賜りたい。また両国の社会環境も異なり、日本には日本なりの制約があるだろう。これらの意見は御参考にまで述べたものである。共同してよりよい辞典を作りあげたいという考えから忌憚のない意見を出した。これも中日友好のための友誼の発露と考えている。

不適当な個所については御諒承を願いたい」とあったが、これは復旦大学の方々も全く同じような態度であった。

辞典の評価

予期以上の好意的な評価を受けているように思う。優点としてあげられたのは、

一、語彙が豊富である。現代漢語をはじめ、方言、旧時の語まで広く集めている。
二、語彙の選択及び語義、解釈等において、中日両国人民の友好関係を物語っている。事物の真実を反映している。

三、普通話（口語）を重視している。

四、審音表に基づき、漢語拼音方案に依って注音している。

五、簡化字を用い、繁体、異体を並記している。

六、付録が多彩で、特に日中字形対照表は便利である等であった。そしてこの辞典は中国語を学ぶ日本人の工具書たるのみならず、中国人が日本語を学ぶのにも役立つものである。中日文化交流、人民往来を促進する役割を果たしていると評価された。

後日、北京で郭沫若先生にお目にかかった際にも、さきに中国へ寄贈した一千二百冊の中日大辞典は、各方面で活用されているとお話を伺うことができた。また、上海で、たまたまバスに乗り合わせた女性が一冊の中日大辞典を所持しているのを見かけて問い合わせたところ、上海市教育局に勤務しているとの返事であった。思いもしない場所で、中日大辞典を見かけて、些かなりとも役立つっていると偶然ながら確認できた。

中国側の意見

座談会で述べられた中国側の意見を一、二の実例をあげてまとめて紹介する。

一、中国人民の思想、感情に合致していること。事物の真実を反映していること。特に歴史事件に対する説明は一步進めてその本質を暴露することなどが必要である。例えば、「中国」の説明中、中華人民共和国の略。また「為」の解釈の例文中「為人民服務」。また「毛沢東思想」の説明などはその好例である。また「頼租」の解釈即ち、地代、年貢などを納めないこととあるがこれは正確ではない。まず現在はこのような事柄自体が存在しない。従って語もない。解放前の語である旨の注が必要である。旧時、地主が農民を軽蔑して言った語であり、これは農民が地主に反抗する手段である「抗租」に他ならない。また「長髮賊」「教匪」「拳匪」などの語は封建地主階級の農民階級に対する蔑称であり、現在の中国人民の思想、感情に合わない。また「七七事変」説明中、盧溝橋で勃発した日本軍と中国軍の衝突事件云々とあるが、これは日本軍国主義分子が

中国軍に対し発動した侵略戦争である。歴史事件に対しては本質を明確にする必要がある。

二、あいまいな、正確でない語や説明を訂正すること。「脱褲子」は「脱褲子割尾巴」として用いる。元来「割尾巴」に重点がある。プチブル思想を刈り取る、古い思想を剔抉する意味であり、説明中のパンツを脱ぎ云々は事実には合わない。また「最可愛的人」は抗美援朝の時、中国人民志願軍に対する親しみの称であり、中国人民解放軍に対してのそれは「親人」と言う。また「光荣之家」は戦死者を出した家に限らない。中国人民解放軍に参軍した者の家族及び革命烈士の家族である。また「三八作風」は現在あまり言わない。「三句話八个字」として用いる。また「三大規律」は「三大紀律」が正しい。また「民警」は「人民警察」の略である。人民に服務する警察の意であり、「公安局」のことである。

三、文化大革命以後の状況を反映すること。「紅五類」、「黒五類」、「自来紅」などは一部の誤った考えから出たもので削除したかどうか。「五類分子」も同様であるが、「四類分子」はある。また「劉少奇」は、かつて国家主席の職を盗みとり、一九六八年あらゆる職務を解かれ永久に党から除名された。

四、規範化された語とそうでないものを明確にすること。「気候站」は「氣象站」、「無投信」は「無着郵件」が規範化された語である。外国の地名の音訳においても同様である。「維爾賽」は「凡爾賽」が正しい。また「播音小姐」、「紅帽」、「売地契」などは旧時の語であり現在はない。このような語は載せないか、載せるならば誤解を与えないよう旧時と注しておき、現在は使わぬことをはっきりさせておく。このような取扱いをすべき語は多い。

五、説明、解釈の日本語は中国人にとってまたとない日本語学習上の教材の役割を果たしている。「我来試試看」を「どうれ、私が試してみよう」と訳しているような、生き生きとした、適切な日本語が与えられている例は非常に多いが、なお一層辞典の隅々まで気を配って欲しい。「虚心」を「すなおに」、「工作」を「はたらく」、「学習」を「まなぶ」といったような本来の日本語も当てて欲しい。「工作する」、「学習する」といった表現形式ではないのの必要としている。「既往不咎」を「水に流す」、「挑撥離間」を「水を差す」としたい。

六、方言、発音について。これらは非常に複雑で判断は容易でないがと前置きし、八方言区に分けたらどうか。「打瞞充」が滬方言とあるのは吳方言、また「打整」、「打皺」は北方方言である。俗語を区別して標示しているが、これは上品な語に対して卑俗な語の謂いであろうが、現在では普通話と方言の別があるだけである。「成績」、「幹部」などは完全に軽声である。

以上六点にまとめて紹介した。指摘は二百箇所に及んだ。現在これらを整理し他日の検討に供するべく仕事を始めかけている。ただ甚だ残念であったのは、中国滞在日数が少なく、日程の関係で、北京大学、復旦大学での座談会には十分な時間をとることがで

きなかつたことである。そのため、発言を予定されていた人々の全員が意見を述べるといふわけにいかず、また発言された人でもかなり内容を割愛して話されたようであった。返す返すも心残りである。しかし今後継続的な大学間の交流が軌道に乗れば、今回の座談会で指摘されたものの外、更により多くの教示を得ることができ、より一層充実した辞典にしていくことができよう。将来これが実現する日の一日も早からんことを願うとともに現在においても出来るだけのことをしなければと思うものである。

中国の印象

中島敏夫助教授

北京上空

飛行機の外はもうすっかり暗くなっていたが、西と思われる右後方の地平線のあたりの空だけに、まだわずかな明りが残っていた。私は中国民航のジェット機の右窓側に坐り、窓に顔をくっつけて外を見つづけていた。広州から上海へ飛び、上海空港で夕食をとり、上海発、夜七時四十五分、北京へ向かった。もう一時間半近く飛んだ。遠い空で音もなく雷が光る。下を見おろすと、暗いが高度が低くなってきているのが判る。じっと目を凝らしていると、ちようど、蛍の淡い光のように暗い光が、微かに点在している。人家の灯だろう。もう北京へ着く頃だ。この機は時速八五〇キロということだったが、やがて蛍の光は数を増した。あたかも、散りばめた宝石が、暗闇の中で青く静かに光る王冠のように思われてくる。高度が下がるやがて一列に並ぶ光はつきり目に入る。道か。そしてあの王冠のような光が、北京なのか。私の頭の中に、かつて札幌から羽田へ、夜、着いたときのことか浮かんた。あの時は、確かに声を呑むような驚きだった。窓から見おろした視界全体が、見渡すかぎりの灯の海だった。旋回するにつれ、その灯の海は斜めに傾いて、どこまでも続いた。あの東京の夜景にくらべると、何と控え目な輝きだろうか。下はもう市街というよりは広い田園という感じだったが、すでに北京も郊外なのか。われわれの飛んだ下に毛沢東主席が実際にいたのか、彼は何をしているのだろうなど、とりとめもないことを考えていると、北京へ来たということが実感となって感じられてきた。やがて飛行機は着陸態勢に入った。

夜の天安門

空港からは三台の車、中国製「上海」で市内に向かった。空港を出た所は、もうすっかりテレビでお馴染みの並木道。その一直線の道を時速六、七十キロで走った。街路灯のつかぬ真暗な道で、車は前照灯を消して、小さな車中灯だけで走った。時たますれちがう対向車も同じようにヘッドライトを消して近づいた。交叉する道路との四つ辻には、真中に赤い電灯がぶらさがっていた。その真暗な路を、時々、灯もつけず自転車走ら

せる人があった。夜の仕事を終えた人、あるいは今から仕事に向かう人のようだった。工場は大体三交代でフルに動いているとのことであり、市内に入ると「通宵商店」、終夜営業の店が開いていた。私の横には張宗法さんが坐っていた。彼は二十七、八歳、労働者出身といった感じで、広州まで李何林教授とともに、出迎えてくれた南開大学の事務主任。助手席に大学の工作員の耿書豪さん、それに運転手の汪さん。皆で充分中国語の理解できぬ私に対して、丁寧に一生涯懸命、判らせようと努力してくれる。道中二百メートルもあろうかと思われる広い通りを通っている時、張さんが右側を指さして教えてくれた。天安門だった。北京到着の直後に天安門を見ようとは思ってもいなかっただけに、その赤い城門が暗いかなすかな照明の中に浮かぶ光景は、私にとつては夢を見るような風情であった。

北京―西安―上海

われわれの旅行は、北京―天津間の往復には車を使った。一六〇キロ、二時間余りの行程である。そのほかは、飛行機と汽車だった。最後の上海―広州間は、最初、飛行機の予約までとつてあったのを無理に汽車に変更してもらった。浙江・江西・湖南・広東省を横断する三十三時間の大旅行だった。だがここでは北京―西安、西安―上海の空の旅、その空からの景を思い出すまま書いてみたい。それは広大な中国の北と南とを、実際に対照的にわれわれに見せてくれた。西安行の飛行機は、ありがたいことにジェット機ではなくターボ・プロップ機だったので、一万メートルもの高空は飛ばなかった。下が手にとるように見えた。河北省の大平野から、山西省に入ると、山また山の連続である。空から見たその景は、あの模型の地形図と全く同じだった。白褐色の山が、等高線で層をなして積み上げられている。山の頂きまで、あるいは高台状の上まで、何層にも積み上げられている。緑はほとんどないが畑のようだった。文字通り耕して天に至っているのである。だがこの土の色は、果して水を少しでも含んでいるのか。模型の地形図には、ところどころ深い切れこみが入っていた。谿谷である。しかしよく見ると、その谿谷は、ある長さが続くと途切れてしまう。出口、入口がない。そして水の色は認められなかった。

私たちの飛行機は一直線に太行山脈を横断していた。後で地図を見て気づいたのだが、私たちが飛んだやや南の方に、大塞があった。中国全土で「農業は大塞に学べ」といつている、あの大塞である。これまた文字通り「愚公山を移す」の精神で、ほとんど人力だけで山に穴を掘り抜いて水を引いてきた、その苦労とその必要性、それを私はあの当りに見たと思った。今年、中国の南方では水が多過ぎ、北方では旱ばつたという。そう言えば広州に近い北江では、汽車の中から見ていて、川だと思っていたら、その水の中に電柱が並んでいた。張さんの話では、北では『旱澇保収』、旱ばつを、井戸を掘ることによって乗りきり、ほぼ平年作を保った、という。中国農業の鍵は水である。その並み並みならぬ自然条件との困難なたたかい、今、中国は全土をあげてそれと取組み、一歩一歩着実に前進していると見受けられた。

水が鍵だということ、南では逆の意味でそういえる。西安から鄭州・南京を経て上海へ向かった、空からの景は対照的にその姿を示してくれた。十二時、鄭州を飛びたつと、真下に見える川の水は、鉱石を洗い流したあとのように濁っていた。その赤茶けた色の川に、緑白色の川が合流する。色が変わり、川巾が広がる。山地を抜け出すと地表は、灰褐色に水を湛えた水田と緑の水田とのつぎはぎ模様である。その間を川が蛇行する。それはちようど、大地をのたうちまわる大蛇のようだった。上空から見はるかす地平線の彼方まで、幾筋もの川が、低きを求めてのたうちまわりながら、東南の揚子江をめざす。淮河水系の川の群れである。飛行機の高度が下がる。手にとるように判る。陸地が水の中に浮かぶ、といった感じである。ありあまる乳褐色の水。この水の氾濫、わずかの水位の高まりが、すべてを浸してしまうのではないだろうかと思われる。一旦、増水した水は、どこへ排出すればよいのか。揚子江の勾配が、河口までの四百キロで十万分の一、落差がたった四メートルという驚異的な実体を、私は目の前に見た。水の筋が、水田の間を縦横に走る。それはちようど道と同じように、一軒一軒の家へ通じる。家を囲む木々の茂みは島である。まさしく「南船北馬」という所以だ。水筋は集まって一つの川となり、川は集まって更に大きな川となる。その上を各種の舟がゆく。その川筋は更に大きな川になる。そして遂に来た。揚子江であった。今までの川筋とは全く桁ちがいの中。満満たる濁水。それはまさしく川の王者であった。スチュワードスが「changjiang da qiao」くり返し教えてくれた。揚子江に橋がかかっているのだ。長江大橋だ。皆が席を立てて左側の窓をのぞいた。長江大橋を、それも空から見ようとは思ってもしなかつただけに、私は興奮した、機はかなり低い。みるみる遠ざかる。そして右へ旋回するにつれ、視界から消えた。いよいよ南京であった。

天津市街の散策

地上のことも一つぐらい書いておかねばなるまい。天津滞在最後の夕方のことだ。日程がぎっしりつまっていて、われわれにはほとんど自由行動をする余裕はなかつたが、このままでは何としても心残りだということで、夕食後、池上・今泉両先生と私の三人は外へ出た。鈴木先生はお客さんがあるということだった。池上先生は三十数年前の記憶をたよりに、そしてまたその面影を求めて、どんどん先に歩いていられる。誰かれかまわずに言葉をかける。道をきき、建物についてたずねる。とにかく、何でも話しかけないではおれないようであった。新華書店で本を買い、その包みをかかえ、方角もわからないままどんどんと、嫌になるほど歩いた。天津では夕方八時過ぎまで明るいのだが、そろそろ暗くなってきた頃、中心公園という市の中心の公園に入った。園内は日暮れどきの散策を楽しむ人でいっぱい。やつと空いた腰掛を見つけて腰をおろすことができた。私たちの前には一人の青年が、薄暗い夕やみの中で勉強していた。私たちは話しかけた。

青年に道を聞いて繁華街へ出た。混雑する人々。街には並ぶ商店の明かりだけで照明はなく、すっかり暗いが、何と人の多いことか。百貨店の前では、水瓜の種を袋からと

り出して売る男、水中に浮かべるプラスチックの金魚、花を売る男、声をかけながらの立ち売りを人々がとり囲む。映画館から次々と人が出てくる。私たちは食料店に入った。品は実に豊富だった。物珍しく、手にと取っては見てまわった。池上先生は食べたいかどうかとは関係なく買って見ないではおれないらしかった。杏子の乾したの、マントウ、買っては私にくれる。今泉先生も天津栗羊羹を買いこんだ。

アイスクャンデー売りは大変な人気だ。街角の煙草屋のような店で売っている。私は買うことにした。表示を見ると、氷〇(木十羔)(ピンガオ) 両毛、氷棍児(ピングル)五份とあった。一元が約百四十円、一元が十毛、一毛が十份である。棒のついたのしか残っていないのだが、どちらかよくわからない。一応大きな紙幣で釣りをもらうことにした。列はできていない。てんで、われ先に、手をのばして大混雑である。おとなしく順番を待とうとしても到底無駄だと知れると、ラッシュの電車に乗りこむ要領で強引にもぐりこんでいった。三本を手に入れ、お釣りを勘定してみると、棒はついているが氷〇(木十羔)らしかった。三人は歩きながら食べた。歩きつづけてきたせいもあり、ことのほかうまかった。

百貨店で買物をしたわれわれは十時閉店ということで裏口から、ぞろぞろ人混みの流れにまじって外へ出た。ただのように安い拓本(四毛)を見て買った、その収穫で、池上先生と私は興奮ぎみだった。「全部買ってでもいい」といいながらも、そこは遠慮して五、六冊にとどめた。外の暗い街路を、笑いざぎめ往来するたくさんの人。池上先生は「まるでパリ解放じゃないか」と言う。私は彼らの表情に、あわてずせまらず、悠々と生活を楽しむ心のゆとりを読みとりながら、是非もう一度、やって来たいと思わずにはおれなかった。

心打たれた歓迎ぶり

総じて、今回の訪中に際して中国側の見せてくれた歓迎ぶりは並み並みならぬものだった。各地の人々が、できうるかぎり精いっぱい歓迎で迎えてくれた。七十歳の李何林教授、張さん、通訳の符さんは、始から終りまで、つききりで面倒を見てくれた。その誠意ある態度には、われわれ四人、一様に心打たれた。南開大学工作員の耿さん、郭さんのことも忘れられない。それに短い時間の接触にもかかわらず、いつべんに親しくなった人々。南開大学の高維国さんは二十代の青年かと思われる中文系の先生。きれいな北京語で人なつっこく話しかけてくれた。私たち二人は短い時間に何もかも話してしまおうとばかりに話しあった。私の貧弱な中国語がうらめしかった。彼の奥さんは小学校で作文を教え、上の女の子は八歳、下の男の子が一歳八ヶ月という。上海の宋さんと給料のことを一生懸命話し合った。

忘れられぬ人々

さらに名前も知らぬ、街で出会っただけの人の顔も思い出す。天津の街角で話した二人の小学生兄弟。私にシエンフーから来たのかと聞く。そのシエンフーが判らないでいたら神戸だった。飛行機の中で張さんと親しそうに話していたスチュワデスあまり可愛

かったので、あとで張さんに、知り合いかときくと、いやちがう、という。でも親しうだったね、という、同じ上海出身だったのだ、といった。それは可愛い娘さんだった。南開大学のカメラマンの方が、ふと示してくれたやさしい心づかい、思い出して心も熱くなる。大学の図書館の漢籍の書庫を一生懸命案内してくれた背の高い老人。その強い眼鏡をかけた顔が忘れられない。印象ぶかいことが次々と思いつかれる。しかし、あの高先生が座談会の席上「万人抗」について指摘したとき受けた印象は特別強烈だった。私はやさしい高さんの顔を見ながら、われわれ日本人は、かつて、これら人々に対して、本当に戦争をしかけ、侵し、殺しを重ねたのか、と自らに問いかけてみないではおれなかった。疑いようない答えに對し私はくらくらと目まいを感じる思いであった。池上先生の話によると、盧溝橋事変のとき、天津の中学在学中の池上先生の目の前で、日本の飛行機が南開大学を爆撃したという。爆弾の煙が消えた後、今迄見ていた図書館のドームの姿が消えていたという。池上先生からこの話を聞いていなければ、中国側の態度からは到底、想像もつかないことであった。

日本に帰ってきて、中国滞在中のさまざまな印象を心に思い浮かべるとき、あらためて中国側の好意と誠意に心から感謝しないではおれない。とともに、日本と中国との、人と人との具体的な親しい交わり、その必要と願いとを今更の如く感ずるのである。

以上で訪中団一行の報告を終る。写真特集を含め、これまでになく、身近な中国を感じ、中国への理解を一層深めていただけるであろう。

鈴木団長の報告にもあるように、本学から中国側に教授や学生の招待や交流を具体的に明記した四項目にわたる提案を行った。今回の訪中は、本学の建学以来の大きな特色としてあげられる中国研究を大きく発展させ、さらに、本学と中国とのきずなをふたたび深める重要なきかけをつくったことは確かである。

(注) **中日大辞典** 昭和二十九年、とくに日中友好協会を通じ、中国保衛世界平和委員会から日本人民に寄贈された中日辞典カード十四万枚(旧東亜同文書院大学華語研究会で昭和八年以来作成されたもの)を基礎に、その後の中国の新しい情勢や言葉を加え、本学中国研究陣の十三年にわたる困難な編集作業を経て、昭和四十三年二月に刊行されたもの。四五年春、さらに改定を加え、他に類をみない中国研究の貴重な辞典として高い評価を受けている。